グラールに舞う金の閃光

金色の戦姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グラールに舞う金の閃光

【Ｎコード】
Ｎ０７８３Ｙ

【作者名】
金色の戦姫

【あらすじ】
３年前『ＳＥＥＤ事変』によって深い爪痕が刻まれたグラール太陽系。
その影響は資源枯渇という形で顕れる。
人々は事態を打開する手段『亜空間航行』に、期待を寄せていた。
海底で新たに発見された、旧時代の遺構。
トラブルによりその場所へ取り残される少女。
彼女は一緒に取り残された傭兵の女性と共に、脱出を図る。

これが後に、グラール中を巻き込む大事件へ発展する事など…少女達は知る由もなかった…。

割と勢いで思い付いたため矛盾だらけかも知れませんが、暖かく見守って頂けると嬉しいです。

ＰＳＰｏ２∞以前の内容については関知できません、ご了承下さい。

…え、ロリ巨乳は邪道？

何それおいｓ（ｒｙ

プロローグ（前書き）

とりあえずサワリです。

プロローグ

遠く離れた世界…。

３つの惑星と、人工衛星で構成された世界・グラール太陽系。
ここはヒューマンと、彼等を祖とする３つの種族達が共存する世界。

『テクニック』と呼ばれる技術に秀でたニューマン、獣の柔軟さと
鋭敏な五感を手に入れたビースト。
機械の体とヒトの心を持つ人造生命体キャスト。

過去に種族間衝突こそ数度あったが、現在では互いに共存している。
そんなグラールで、３年前大規模な戦いがあった。

『ＳＥＥＤ事変』…。
外宇宙より謎の生命体群が飛来し、グラール中で暴れ回ったのだ。

この事態に、民間警備組織『ガーディアンズ』の有志達が奮闘。
彼らの活躍でグラール中が結束、貴賤関係なく脅威に立ち向かった。

ガーディアンズ有志によりＳＥＥＤ発生の元凶が封印され、事件は
終結。
人々は平穏を取り戻す事ができた…が、事件の爪痕は予想以上に深
かった。

戦いにより破壊・消費した資源が、枯渇を始めていたのである。
人々は新たに噴出したこの問題を解決すべく、活路を外宇宙へ求め
る。

『亜空間航行理論』…。
一種のワームホール、即ちワープ航法である。
これで他星系へ散り、その住人として生き永らえるという狙いなのだ。

亜空間理論を主導している『インヘルト社』により、わずか3年で跳躍の実験を行えるまで進歩した。

人々はこの技術が、一日も早く完成する事を望む。
自分達の歴史が終わらないように。
…希望の扉が開かれる刻を願って…。

プロローグ（後書き）

第1話はすぐ更新したいと思います。

出逢い（前書き）

本作における括弧の使い方です。
揺らぎがある…かもしれませんが、悪しからず。

「」：通常のセリフ。

『』：行頭からある場合はキャストのセリフ。
そうでない場合は固有名詞等の注目すべき単語。

《》：通信回線を使用している者のセリフ。

「（）」：心の声、ただし外側の括弧は変化する。

出逢い

～Ｓｉｄｅ『Ｆ』～

グラールにある惑星の一つ『パルム』の海底遺跡。
私は、新たに発見されたというこの場所の調査依頼を受けていた。
依頼されたのは私だけではないらしく、同業者が多く見受けられた。

『君も、ここの調査依頼を受けたようだな。
一人でいるところを見ると腕には相当の自信があるとみえる…おっと失礼。
俺はバスク…見ての通り、キャスト族の傭兵だ。
しかし、ただの調査任務にしては人を募りすぎな気がするな…ん？』

バスクが何やらブツブツと文句を呟いている、一人の少女を見かける。

「ったく…どうして解ってくれないのよ。
ここはヤバい感じだって、何度も言ってるのに」

『…何だ、あの子供は？
腕利きの傭兵には、とても見えんが…』

その少女に若干呆れ気味のバスク。
だが少女は次の瞬間、頭を押さえて蹲ってしまう。
直後に周囲が大きく揺れ、警報が鳴り響く。

集まっていた傭兵達はこの異変に対して、自分の身の安全を確保するべく脱出を選んだ。

私はあの少女が気になって脱出が遅れ、一緒にそこへ取り残されてしまった。

――――――――――――

「出して、出してよー！
この…開きなさいよ！！」

甲高い怒声と共に、少女は閉ざされた扉を叩く。
程なく諦めたのを見計らい私は少女に声をかけた。

「あの…」

「…誰！？」

警戒をあらわにした口調で私の姿を認める少女。
が、すぐに警戒を解く。

「あ…あんたもここに閉じ込められちゃったんだ。
じゃあさ、協力してここを脱出しようよ」

断る理由はないので、協力する事にした。

「そういえば、自己紹介がまだだったよね。
私はエミリア…エミリア・パーシバル」

「…フェイト、フェイト・テスタロッサだよ。
宜しくね、エミリア」

「…えっ？

テスタロッサって…ああ、こっちの話だからそんなに気にしないで！」

エミリアのリアクションに疑問があるが、今は一緒に脱出するのが先決だと己に言い聞かせる。

聞けば武器は持っているが実践経験がないという。
仕方ないので、彼女を護るように前で戦う事に。
扱い慣れていない盾に苦戦するが、何とかエミリアを護りつつ進んでいく。

――――――――――――――――

奥へと進み、結構な広さの部屋に出た私達。
隅に鎮座している、大型の自律機動兵器に不気味さを感じる。
エミリアも「…これって、今にも動き出しそうな感じじゃない？」などと言っている。
この展開は、やっぱり王道だと思う…あの機動兵器が襲ってくるとかね。
…と、考えたそばから動き出してしまった！

「…ち、ちょっとぉ！
言った途端に動き出さないでよ～！！」

「…エミリア、大丈夫！
私に任せて…その代わり、バックアップお願い！」

パニック状態のエミリアを励ます私。

「…わかった！

あんたの、その大丈夫って言葉…信じるからね！！」

――――――――――――――――

私達二人と、大型機動兵器スヴァルティアの戦い。

サイズ差によって生じる、機動力の差を生かした一撃離脱で翻弄する私。

関節部に確実な打撃を与え続ける事で動きを鈍らせ、ついに撃破した。

巨体が崩れ落ちる様子を、呆然と眺めるエミリア。

「勝っ…た…？

…すごい、凄いじゃん！

あんなでっかいのを簡単に倒しちゃうなんて！！」

「…エミリアが、しっかりフォローしてくれたから…安心して戦えたんだよ。

正直にいうと、私一人じゃ勝てなかったからね…」

…この時の私達は、強敵を退けた事に対する安堵から気が緩んでいた。

そのため、もう一機が動き出していた事に気づくのが遅れてしまった。

（ガシャンッ！！）

「…えっ！？」

気づいた時にはもう、例の2機目がエミリアの近くに迫っていた。

スヴァルティアが、自身の腕を大きく振り上げる。

「エミリア、危ない！！」

私はエミリアを突飛ばし、スヴァルティアの前に立ちエミリアを庇った。

スヴァルティアの左手から鋭く伸びる爪が、私の胸を正確に貫く。

その後の事は、全く覚えていない…。

―――――――――――――――

～Ｓｉｄｅ？？？～

惑星パルムの某所、新しく発見された遺構付近。

惑星間航行可能な小型船で待機していた『私』の元に上司から指示が下った。

『あれ、早かったですね…何かトラブルが？』

《…おう、すまんが急いでこっちに来てくれ。

あのバカがレリクスの中に閉じ込められた…どうやらもう一人いるようだから、ついでに救助するぞ》

『…了解です！』

船内のオペレーション席に座っていた私は、すぐさま席を立つ。

一刻も早くレリクス内部へ突入して、要救助者二人を助けなければ…。

―――――――――――――――

…レリクス内部に突入した私は、開けた部屋で二人を発見した。

『エミリアっ！！
…よかった、気絶しているだけだ…。
もう一人は…うわ、すごい流血の跡！！
この様子じゃ、もう…』

血液特有の強烈な匂いに、彼女がもう手遅れであると確信した。
せめて手厚く弔うために、遺体を抱えようと近づいて違和感に気づく。

『…ん？
かすかに息遣いが聞こえるような気が…。
…あれ、この人…大出血の原因となった傷がない？
それどころか体には傷一つついていない…！？』

ありえない事態に私は困惑したが、二人を連れて脱出するのが先だと判断。
エミリアを背負い、重傷を負ったはずの女性を抱えて船に戻った。

―――――――――――――――

グラール太陽系を構成する超大型コロニー『クラッド６』。
そこに本拠を構えるＰＭＣ（民間軍事会社）『リトルウイング』のオフィス。

…まあ、ＰＭＣといっても今の実情は便利屋と大して変わらない。
要人警護や廃棄プラントの調査といった、表舞台での活躍が到底望

めそうにない仕事ばかりだ。
…正直私はあまり戦場には行きたくないのでその辺は助かってるけど。

『アー、お疲れ様ネ！
ソノ人が、通信で言ってた重傷を負ったヒト？』

リトルウイング受付嬢兼、経理担当のチェルシー。
微妙なイントネーションで喋る女性キャスト。

『うん。
チェルシー…悪いんだけどこの人の事頼める？』

『…ハイハイ、オ姉サンに任せるネ！
それよりも、血糊はすぐに落ちなくなっちゃうノ。
早く洗浄に行って来た方がイイヨ！』

『あ…うん。
それじゃ、頼むね』

女性をチェルシーに預けて自室の洗浄室へと直行する私。
…まあ、シャワールームのようなものだと思って。

私は高さ３Ｍ程のポッドに入り、軽く目を瞑る。
ナノマシン入りの調整液で満たされた、ポッドの中でたゆたう。
ナノマシンが戦闘で受けた傷を修復し、汚れも綺麗に洗い流してくれる。

３０分後に傷も汚れも全て消え、ポッドから出る。
その足で社に戻り、女性の容態を聞いてから報告書をまとめるため

にデスクへと向かった。
今は眠っているだけで命に別状はないとチェルシーは言っているが…。

―――――――――――――

～フェイトＳｉｄｅ～

人工の光が照らす、明るい空間…そこで目を覚ました私。
人工物特有の、直線形状が多い周囲。
意識が途切れたあの時とは明らかに違うその様子に、軽い混乱を覚えた。

『…オゥ、やっと眠り姫のお目覚めネ？
チョット待っててネ。
シャチョサン、シャッチョサ～ン！』

その人は、部屋の奥にいる責任者らしき人を呼ぶ。
生返事をした後、のそりとこちらにやって来た。

「…やっと起きたか。
ほほー、ものの見事に訳が解らないって顔してやがるようだな」

含み笑いを向ける男性と、ニコニコする女性。
一向に事態が把握できないのは、今更言うまでもない事だった…。

リトルウイング・前編

～フェイトＳｉｄｅ～

「…あー、まずは自己紹介からだよな。
俺はクラウチ・ミュラー…この民間軍事会社『リトルウイング』を、一応は取り仕切ってる者だ。
…まぁ、恥ずかしい話だが軍事会社ってーのも肩書きだけでな…便利屋とあまり変わらねえんだ」

『ワタシ、チェルシー。
この会社で、受付と経理を担当してるノ。
よろしくネ』

「あ…フェイトです。
フェイト・テスタロッサ・ハラオウンと言います。
初めまして…」

自己紹介をしあう私達。

「おう…それにしてもお前よく無事だったな。
普通なら即死でもおかしくない状態だったらしいじゃねぇか？」

『そうだヨー、服が血糊で汚れてるからわかると思うケドネ？
イッパイ血が出てるのに、そういう傷はなかったってアノ子もだいぶ首を傾げていたヨ』

「…『あの子』って一緒にいた子の事ですか？」

私の問いかけに微妙な顔をするクラウチ。
「あー、半分は当たってるって奴かね。
丁度来たみてえだし、紹介しておくぜ」
クラウチの言葉に合わせるように、部屋のドアが開け放たれた。
入ってきたのはエミリアと青い服に身を包んだ女の子だった。
耳の形が明らかにソリッドチックなのでキャストだとわかる。
…ただ背丈がエミリアより頭ひとつほど小さい。
『…クラウチ、エミリアを連れて来たよ』
「おう、丁度いい。
今目覚めたところだ…客に挨拶しとけ」
「初めまして、エミリア・パーシバルです…。
…え、あれ？」
…私はやる気のない挨拶をするエミリアに、意地悪を言ってみた。
「2回目だよ、エミリア…初めましてはヒドイな」
「…え、えぇ～～～！？」
仰天するエミリア。
無理もないか…話によると私が死んだものと思ってるらしいから。
「う…ウソ…生きてる？
ホントに生きてるの？
何で…どうして！？」

そこへ、クラウチが呆れて横槍を入れる。
「ったく…勝手に人を殺すなってぇの。
お前本当テキトーな事しか言わねえな？
…それはそうと、やっぱりお前ら知り合いだったんだな？」
そんなやり取りをしていると、青い服の子が咳払いをしてきた。
『…コホン！
そろそろ私も挨拶していいかなぁ？』
「あ、ああ…すまん。
彼女の名はフェイトだ」
『…初めまして、フェイトさん。
軍事会社リトルウイングに所属している、アリシア・テスタロッサです』
アリシアは可愛くお辞儀をしてニッコリと笑う。
一連の動作には全く嫌味がなく、可愛らしさを無駄に増幅している。
『アリシアは、ウチに所属している傭兵の中でも特にイイ成績を残してるワ。
カワイイ上にヤル女、って感じナノヨ』
チェルシーの賛辞に、顔を真っ赤にするアリシア。
照れ隠しに、話題を強引に変えてしまう。
『…あの、今日はこのまま二人を休ませてあげたいと思うんだ。

エミリアはともかく彼女…フェイトさんはまだ調子がよくないみたいだし』

「ダメだと言いてえが俺も鬼じゃねえ…お前が望むのなら、そうしてやんな。
そのかわり明日は朝イチで来い、当然3人でな。
アリシア、フェイトを居住区画に案内してやれ」

『はーい♪』

アリシアに連れられリトルウイングのオフィスを出る私とエミリア。
居住区画へ行く前に血糊で汚れた服を新調するため、一度服飾店に寄る。

『…お金がない、って？
ああ、それなら私が出してあげるよ』

アリシアのその言葉に驚き遠慮する私。
だが、アリシアは微笑んで強引に私の手を引く。

『私もパーツ…いや、服を新調したいしね。
ついでに買ってあげる』

そう言ってウインクしつつ店に入るアリシア。
彼女のこの雰囲気に、私は何故か懐かしさを覚えるのだった…。

――――――――――――――――

～アリシアＳｉｄｅ～

私が所属する民間軍事会社リトルウイングに、久々の新入社員がやって来た。

最初その人を見て、すごくビックリしたな。
だって…眼や髪の色が全く同じ、顔立ちもそっくりで声まで似てるんだもん。
ただ…体格はヒューマンの大人だから、そこは比べる事ができて内心ほっとしている。

私の身長は１２０～１３０センチ台…はっきり言ってキャストの中では、かなり小柄だろう。
小ビーストの人達とあまり背丈では差がない。

…それはともかくとして、新しい人はどうやらあの時海底レリクスで血まみれになっていた人だった。
どういう訳か出血の痕跡である傷が、綺麗さっぱりと無くなっている。

会社の現統括責任者であるクラウチと話して、彼女をリトルウイング社員として迎える事になった。
海底レリクスの一件で接触した、数名の社員・傭兵の証言から彼女が腕利きだというのが解ったためだ。
クラウチが保護者の代行をしている少女・エミリアが彼女に懐いている、というのも理由ではあるけど。

私は顔合わせを済ませて、彼女…フェイトを休ませるように提案した。
クラウチは渋々ながら了承し、私は周辺地区の案内も含めてフェイトを居住区へ連れていく事に。

―――――――――――――――

『…まずはそのボロボロになった服の新調だね。
丁度私も、新しいパーツが欲しかったし…お店行ってみようか』

「えっ…でも私、そんなにお金持ってる訳じゃ…」

不安げに話すフェイトに、私は胸を叩いてみせる。

『大丈夫、私が全部出してあげる。
お近づきの印に、っていう訳でもないけどね』

私はそう言ってフェイトの手を引きながら、戦闘用の服飾店へ入っていった。
ここは普通の服はもちろんキャスト用の外見パーツも扱っている。
組み合わせ次第で、魅力を十分に引き出せるはず。

眠いとか言っていたはずのエミリアも一緒になって、フェイトの服を選ぶ。

「…あっ、これよこれ！
フェイトには、こんなのが似合いそうじゃない？」

エミリアが選んだのは黒のローゼントライム。
スリットが大胆に入った、セクシーなドレスだ。

『あのね…真面目に選んでくれないかな？
フェイトの、大人の色気は認めるけどね…』

そこへ、当のフェイトから意外な反応が。

「…私はいいと思うな。
私服ではそういう挑発的な服を着た事無いから…」

『…マジですか？』

「いや、ウケ狙いで選んだつもりなんだけど…」

エミリアから服を受け取り試着するフェイト。

「ど…どうかな。
おかしくないかな…？」

『うわぁ…綺麗。
まさに、セクシーな大人の女性って感じだね♪』

ここでエミリアがうわ言のようにブツブツと、何かを言い始めた。
しかも、その視線はとある一部分に集中している。

「一体何を食べたらそんな体になるのよぉ…。
羨ましからんってのは、こういう事なのね…」

意味不明な事を口走ってるエミリアをスルーし、私はフェイトが試着したままの服を精算した。

――――――――――――――――

続いて、私の外装パーツを見て廻る。

キャストの外装用パーツは胴・腕・脚の3つの部位に分かれている。
ヒトが着る服と同じように形状・色彩は千差万別。
組み合わせに対しセンスが問われるのは一緒、という事なのだろう。

私はこれまで、一般に流通していないテスト用外装を使っていた。
首から下が全く露出しない地味な形状の外装。
だけど…やっぱり私だって女の子だから、オシャレに興味がない訳じゃない。
ただ私だけではどうすればいいかわからない…だからこうして、二人に見立ててもらっているのだ。
…とはいっても服と違って現物合わせができないので端末でイメージを知るしかないけど。

「…アリシア、これなんかいいんじゃないかな？」

フェイトが選んだのは露出しつつも、下品にならない組み合わせ。
お腹や内もも、背中が露出しているのが逆に扇情的…かもしれない。
胴：エピカレル
腕：ジェンケルCV
脚：エピカレル

「えー、こっちの方が絶対いいって！」

エミリアはいかにも「メカ少女」といった、露出度の低いチョイス。
ブラとショーツに相当する部分が色分けされてて逆にちょっとエッチかも？
胴：バコローネ
腕：ギムナエルCV
脚：バコローネ

うーん、エミリアのも悪くないけど…ここはやっぱり動きやすさからフェイトの方かな？
…結局はエミリアが選んだ方も買う事になって、結構高くついた。
外装パーツは総じて高いとわかってはいるけど。

―――――――――――――――――――――

一通り買い物を済ませて、居住区へ向かう私達。
オフィスから徒歩１５秒の場所にある二間の部屋。
実は私も大体同じ間取りの部屋を使っている。
リトルウイングに所属する独身社員達にあてがわれる部屋だ。

『…これがビジフォン。
通信機能も完備してる情報端末だよ。
向こうの倉庫には、武器やアイテムなど２０００種を保管できるの。
お金も預けておけるから、いざって時も安心だし。
着替え用の部屋が一番奥になってて、いつでも使えるようにしてあるよ』

部屋…通称・マイルームの機能をフェイトに説明する私。

フェイトがデスクの椅子に座り、ベッドに腰を下ろす私とエミリア。

『さて…次は現状について簡単に説明するね』

…ゴメンナサイ、ちょっと長くなりそうなので続きは後編でね。

リトルウイング・前編（後書き）

気づいた人もいるかと思いますが、アリシアはなのはＡｓに出てるあの子。
ヒュウドラ事件で死亡したアリシアの転生した姿が、ここでの彼女です。

アリシアのボディカラーが青・空色系なのは転生前の記憶を持っているため。
ただ、この時はフェイトの正体に気づいてません。

リトルウイング・後編（前書き）

早くも難産でした。
色々とすっ飛ばしたような気がします…。
かなりの強引な構成…かも知れません。

リトルウイング・後編

～アリシアＳｉｄｅ～

『…チェルシーから少しは聞いたと思うけど、改めて説明するね。
ここは巨大複合企業スカイクラッド社所有のリゾートコロニー・クラッド６。
スカイクラッドの第六支社でもあって、リゾート系の事業に力を入れてるの。
およそ軍事からは縁遠いと思われてたけど、近年軍事部門が新設された…。
それが、私達のいるリトルウイングって訳』

私は、単語一つ一つを噛み締めるように口にする。
フェイトも私の話を静かに聞いていた。

『…で、先のレリクスでの出来事だけど…。
フリーの傭兵として訪れていたあなたは、トラブルでエミリアと一緒に閉じ込められた。
仕方なく脱出するため協力して奥へ進んで、道を塞ぐ大型機動兵器をも撃破。
しかし２機目の強襲を察知できずに攻撃されて重傷を負った…ここまでは間違いないかな？』

情報に誤りがないか二人に確認する。
フェイトもエミリアも首をゆっくりと縦に振る。

『…エミリアが言うには、フェイトはその攻撃で即死してしまった。
エミリアも、その後の事はよく覚えていない。

私が駆けつけた時には既に機動兵器の姿はなく、即死したはずのフェイトの傷も完全に癒えていた…』

それはあまりにも現実的でない出来事。
だが、フェイトがこうして生きている以上認めざるを得ない。

『何か心当たりは…ある訳ないよね。
調べようがないけど、私も心の隅に留めておくよ。
とりあえず私は一旦部屋に戻るね…エミリア？』

必要な事は全部話したので自室に戻るべくエミリアを促す。

「うー、何かすごく眠い…ここで寝ちゃダメ？」

小さく溜め息をつく私に、くすっと笑うフェイト。

「…しょうがないなぁ。
少しなら寝ていいよ」

エミリアのワガママに私は申し訳なく思ってくる。

とりあえずフェイトと共に時間を潰そうと、どこかへ行こうとしたその時。
不意に私達やエミリアとも違う声が脳に響いた。

「お二人とも、少し待って下さい…」

―――――――――――――――

～フェイトＳｉｄｅ～

突然響いた声に足を止める私とアリシア。
穏やかだが気品に溢れた、荘厳と言っていい声。

「…突然ですみません。
あなた方と、こうして直接お話したかったのです」

…神々しささえ感じるその姿に、忘我する私達。

『…あなたは…？』

かろうじて言葉を絞り出すアリシア。

「私の名はミカ…。
あなた方が旧文明人と呼ぶ存在だった者です」

旧文明人。
遥か昔、グラール太陽系に住んでいたと言われる古代文明の住人。
彼らが有した技術は今よりかなり優れていたとか。

「その旧文明人が、私達に何の話ですか？」

「先の、海底レリクスでの出来事についてです。
エミリアは、あの時の事を夢だと思い込んでいる様子ですが…」

「…やっぱり、私はあの時一度死んだんですね」

…そう、あれは現実。
着替える前の私の服が血で汚れていたのだから。

「はい…ですが、あなたを死なせる訳にはいきませんでした。
そこで失われた秘術を使い蘇らせたのです」

『…何のために？』

「今は、私の願いのためとしかお答えできません。
…ですが、決して悪事ではないとお約束します」

「…エミリアの中に宿っている…って考えて、間違いないですか？」

「はい。
今の私は精神だけの存在と言えるでしょう。
ああ、ひとつだけ注意して頂きたい事があります。
特定の人にしか、私の姿が見えません…声を聞き取る事も不可能です。
その事をお忘れなく…」

私達が頷くと、ミカは薄く微笑みながら消えた。
おそらく、エミリアの中に戻ったのだろう。

程なくエミリアが起きて、アリシアと一緒に部屋へと戻っていった。

色々な事があって、かなり疲れたな…。
ベッドに入ると泥のように爆睡してしまった。

…あ、明日朝イチでＬＷに顔を出さなきゃならないんだったっけ？

―――――――――――――――

～アリシアＳｉｄｅ～

翌朝。

「おう、来たな…。
チェルシー、こいつに例の書類渡してやれ」

私がフェイトとエミリアを連れて、リトルウイングのオフィスに入ると…。
クラウチが、チェルシーと共に私達を待っていた。

『リョーカイね！
ハイ、これがウチとの雇用契約書ヨ。
面倒だろうケド、一応目を通してもらうコトになっているからネ』

チェルシーから手渡された雇用契約書に、フェイトは一通り目を通す。

「…それで、ここに自筆でフルネームをサインすればいいんですね？」

『ソウソウ。
本名を明かせない事情とかあるナラ、偽名でも大丈夫ダヨ。
リトルウイングは、来る者拒まず去る者追わず…犯罪歴があってもOKヨ！』

フェイトは苦笑しながら、雇用契約書にフルネームでサインする。

『…ハイ、これで雇用契約完了ネ。
フェイト・テスタロッサ・ハラオウン…オゥ、とても素敵な名前ネ？』

「…よし、そんじゃ改めてよろしく頼むぜ。
まずはアリシアと組んで、エミリアを鍛えてくれ。
そこそこ稼げるくらいまで鍛えてくれりゃいい」

「ぅえ！？
ちょ、おっさん！！」

クラウチの『命令』に動揺するエミリア。

「文句なら、一人で稼げるようになってから言え。
…それとも何か、腕のいい傭兵二人と一緒でまだ不満だってのか？」

「うー…」

口には出さないが横暴だと言いたげに頬を膨らませるエミリア。
そんな二人のやり取りを、私とフェイトは苦笑しつつ眺めていた。

――――――――――――――――――――

私達3人の最初の任務は、海底レリクスにある未踏のエリアの調査だった。

『…それじゃ、フェイトは私と一緒に前衛ね。
エミリアは、後ろで私達の援護を頼むね？』

「うん」

「へーい…」

微笑みながら短くうなずくフェイトに対しエミリアはやる気のない返事。
ここに来ると『あの事』を思い出すのはわかるけど…仕事なんだから、真面目にやって欲しい。

「…はあぁっ！！
グラビティブレイク！！」

『いくよ…！
トルネードブレイク！！』

…フェイトと私のフォトンアーツによる連携で、敵を薙ぎ倒していく。

フェイトはフリーで動いていたというだけあり、戦闘技術は一流。
特に『避け』は敵の攻撃が全く当たらない程、完璧にこなしている。

…え、私？
私は身の長を越える長剣を巧みに振って、敵を近づけさせない戦い方。
トルネードブレイクもその一環で、衝撃波で怯ませるために使っている。

――――――――――――――――――――

エミリアの回復系フォトンアーツでの援護を受けつつ奥へと進む私達。
指定エリアの最深部では、大型二足歩行マシナリー・スタティリアが待ち受けていた。

『二人にとっては、因縁の相手だね。
今回は私もいるから、簡単には負けないよね？』

私はそう言うと、二人より早く飛び出して敵へと斬りかかる。
スタティリアがそれに反応して攻撃してくるが、既に懐間合いへ飛び込んだ私に当たるはずがない。

『遅いよ…！
スピニングブレイク！！』

鍛え上げた脚力をフル活用して飛び上がり、そのまま勢いよく回転しつつ一撃を叩き込む。
…まあ私はキャストだから鍛え上げたって表現は適切じゃないかもね。

私の一撃がクリーンヒットしたのか、スタティリアは崩れ落ちて爆発。
その光景にエミリアだけでなく、フェイトすら呆気に取られていた。

「すご…リトルウイングのエースは伊達じゃないって感じだわ」

「キャストとはいえ私よりかなり小さい体で、私より動けるなんて…」

二人のコメントに私は苦笑する。
二人ももっと経験を積めば私みたいになれるよ…と、一応言っておいた。

――――――――――――――――

船に戻り、依頼主から任務達成の報酬を受けとる。
リトルウイングが受けとる分とは別だ。

『…あ、そうだ！
フェイトにはこれを渡しておくね』

フェイトに一枚のカードを手渡す。

「…これは？」

『あれ、エミリアから同じような物もらってない？
…それは、私のパートナーカードだよ。
連絡先が記録してあるから戦力が必要な時には呼んで欲しいんだ。
フェイトのカードを私達と交換しとかないとね』

「…あ、そういう事か。
それじゃ…コレを」

私とエミリアがフェイトとパートナーカードを交換、連絡が可能になった。

この後のいくつかの依頼も3人でこなし、いい感じに経験を積む事ができた。
しかし…そんな時に受けたひとつの依頼が、グラール全域を揺るがす大事件へと発展していく事になるとは知る由もなかった…。

リトルウイング・後編（後書き）

次回は、キャラ紹介などを予定してます。

登場人物（前書き）

とりあえず、現状での人物一覧です。

登場人物

フェイト・テスタロッサ・ハラオウン

ＣＶ：水樹奈々
２０歳
ヒューマン・女
タイプ：ハンター
身長体重：１７０センチ・４８キロ
サイズ：Ｂ９３・Ｗ５８・Ｈ９１（ＵＢ７０）
主な武器：両手剣・双剣・両剣

ＰＭＣ・リトルウイングにやってきた傭兵の女性。
腕利きらしいが、有名ではないようだ。
惑星・パルムで新たに発見された海底レリクスの調査任務を受ける。
長い金髪に緋い瞳と誰もが目を奪われる美貌を持ち、同性すらも虜にしてしまうほど。

エミリア・パーシバル

ＣＶ：斎藤千和
１７歳
ヒューマン・女
タイプ：ブレイバー
主な武器：ロッド

リトルウイングメンバーの一人。
海底レリクスでフェイトと出会い、共に脱出するべく協力を申し出

る。
どこにでもいそうな少女だが、時折常人離れしている洞察力と分析力を発揮。
両親は既に亡くなっており現在はクラウチが保護者の代行をしている。

ミカ

ＣＶ：大原さやか
２７歳？
ヒューマン？・女

旧文明人の女性。
精神だけの存在となって、エミリアの内に宿る。
「ある目的」のため秘術でフェイトを蘇らせた。
穏やかで女神のような性格だが、一方で相当に意思が強いらしい。

クラウチ・ミュラー

ＣＶ：藤原啓治
？？歳
ビースト・男
タイプ：レンジャー

ＰＭＣ・リトルウイングの現場責任者。
酒好きでだらしないように見えるが、以前は名うての刑事だったらしい。
書類上だがエミリアの保護責任者でもある。

かつて行きつけだった店のママに頼まれ、エミリアとチェルシーを引き取る。

チェルシー

ＣＶ：戸松遥
??歳
キャスト・女
タイプ：レンジャー

リトルウイングで受付嬢と経理を担当する女性。
独特なイントネーションで喋るため誤解を受けやすいが、本人は至って真面目で働き者。
クラウチが常連だった店で働いていた縁がきっかけでリトルウイングに。
その時、大変世話になった店のママに恩返しするため自分の店を開くのが夢。
副業でクラッド６リゾート区画のバーに勤める。

アリシア・テスタロッサ

ＣＶ：水樹奈々
９歳（ヒューマン換算での外見推定年齢）
キャスト・女
身長体重：１２７センチ・５７キロ（素体重量）
サイズ：Ｂ９０・Ｗ５７・Ｈ８７（ＵＢ６７）
主な武器：両手剣・双剣

リトルウイングのエースと呼ばれる傭兵の少女。
討伐系の依頼は大抵彼女が請け負っており、成功率は実に１００％。
小さな体で巧みに翻弄するその姿から「金色の蝶」の異名でも知られる。
キャストの中ではかなりの小柄だが、一方で常識外のわがままバディを持つ。
性格は明るく、子供っぽい一面もある。
キャストには珍しく苗字があるが、その理由を知っている者は極めて少ない。

バスク

ＣＶ：中田譲治
？？歳
キャスト・男
タイプ：ハンター

海底レリクスの調査に参加していた傭兵。
クラウチにスカウトされてリトルウイングに所属する事を決める。
エミリアのような少年少女達の未来のために戦える、聡明な人格者である。
同盟軍時代教官をしていた事があり、トレーニング用ミッションも監修する。

登場人物（後書き）

今後は、順次追加していく予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0783y/

グラールに舞う金の閃光

2011年11月7日10時01分発行